

共催: 横浜国立大学地域連携推進機構・NPO 法人神奈川県自然保護協会

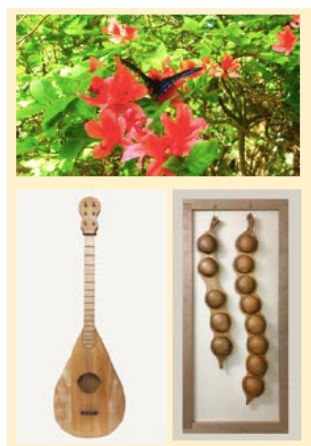
後援: 国際開発学会横浜支部

## 「国連生態系回復の10年」協賛イベント

### 里山再生と生態系の回復

～ウェルビーイングの観点から～

(2021年10月9日(土)開催ウェビナー講演録)



横浜国立大学地域連携推進機構

(地域実践教育研究センター・里地里山×まちづくりラボ)

## 目次

|   |    |
|---|----|
| <u>ウェビナーの趣旨（志村真紀:横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）</u> .....             | 3  |
| <u>開会にあたり（梅原出:横浜国立大学学長）</u> .....                             | 4  |
| <u>神奈川県<small>の</small>植生と外来植物群落（村上雄秀:神奈川県自然保護協会理事）</u> ..... | 5  |
| <u>神奈川<small>の</small>広葉樹林（小池治:横浜国立大学 名誉教授・連携研究員）</u> .....   | 12 |
| <u>里山再生と人間のウェルビーイング（佐藤峰:横浜国立大学都市科学部准教授）</u> .....             | 17 |
| <u>多彩な広葉樹の造形による魅力発信（原口健一:横浜国立大学教育学部准教授）</u> .....             | 24 |
| <u>パネルディスカッション</u> .....                                      | 31 |
| <u>閉会の挨拶（佐土原聡:横浜国立大学地域連携推進機構長）</u> .....                      | 37 |



## ウェビナーの趣旨

(志村真紀:横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授)

このたび横浜国立大学地域連携推進機構では、「国連生態系回復の10年」協賛イベントとして「里山再生と生態系の回復～ウェルビーイングの観点から」を開催することといたしました。ウェルビーイングという言葉には人の総合的な健康や幸福といった意味があります。国連は2021年からの10年を「生態系回復の10年」と宣言しました。日本では何をすべきなのか、本日はこのシンポジウムでウェルビーイングの観点から生態系を保全・回復するためのアクションについて、多面的な観点からアプローチしていきたいと思っております。

横浜国立大学地域実践教育研究センターでは、小池治先生が主導されて、過去に2度、神奈川県大学の大学発・政策提案制度を活用し、調査研究をまいりました。一度目が『里地里山の保全効果に関する学際的研究(2015・2016年度採択事業)』<sup>1</sup>、二度目が、『Woody かながわ～広葉樹の活用による地域活性化と県民の健康増進(2019・2020年度採択事業)』<sup>2</sup> となります。双方の調査研究において、地域実践教育研究センターに関わる教員を中心にした、本学らしい文理融合の学際的な研究を展開してまいりました。

今回は、『Woody かながわ』の調査結果を中心に、プレゼンテーションおよびパネルディスカッションをお届けします。どうぞ最後までお楽しみください。

---

<sup>1</sup>[https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKewibxL\\_ipdj0AhWlrlYBHSXtCREQFnoECAkQAQ&url=https%3A%2F%2Fwww.chiiki.ynu.ac.jp%2Fnexturbanlab%2Fpdf%2Fcbef64ad45310ba32808b66807fcd46b24a33140e.pdf&usg=AOvVaw1MGRwtGI5zaMsw4pfjw8b](https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKewibxL_ipdj0AhWlrlYBHSXtCREQFnoECAkQAQ&url=https%3A%2F%2Fwww.chiiki.ynu.ac.jp%2Fnexturbanlab%2Fpdf%2Fcbef64ad45310ba32808b66807fcd46b24a33140e.pdf&usg=AOvVaw1MGRwtGI5zaMsw4pfjw8b)

<sup>2</sup> <https://www.chiiki.ynu.ac.jp/news/000112.html>

## 開会にあたり (梅原出:横浜国立大学学長)

皆さん、こんにちは。横浜国立大学学長の梅原でございます。本日は今ご紹介あったように「里山再生と生態系の回復」ということで、シンポジウムを開催させていただいているところです。ご存知のように本学のキャンパスは広大な森が広がっています。これは「宮脇の森」と申しまして宮脇昭先生が人工的に設計された森です。ある意味里山のような機能を果たしているのかなと思っております。残念なことに宮脇先生は本年お亡くなりになりました。しかしながら、その遺志は本学のキャンパスに具現化されていると考えます。また、この森をしっかりと活用して、それこそキャンパスそのものが里山になるような、そういう取り組みを本学は続けていかなければいけないと思っていますし、実際、そのような活動があると伺っています。このシンポジウムを機会にしまして、そのような我々のアクティビティをしっかりと全学展開していきたいと思っております。

本学には、施設部が中心となって発刊するエコキャンパス白書という報告書があります。

([http://shisetsu.ynu.ac.jp/gakugai/shisetsu/4kan\\_mane/ecocampus/hakusyo/eco\\_campus2021.pdf](http://shisetsu.ynu.ac.jp/gakugai/shisetsu/4kan_mane/ecocampus/hakusyo/eco_campus2021.pdf))

本年度は、2001年に策定した「横浜国立大学エコキャンパス構築に基づく行動計画」から20年の節目を迎えております。これは、環境報告書の義務づけが始まる前からの大学のアクションです。本学の環境への取り組みが先駆的であったことの証であると大変誇りに思うところです。このような取り組みは、一朝一夕で成し遂げられてきたものではありません。本学は1973年に環境科学研究センターを設置し、2001年には、大学院環境情報学府・研究院、2018年には40年ぶりの新学部となる都市科学部を設立するとともに環境リスク共生学科を設置しました。すなわち、環境に関わる学術拠点を形成し、この分野の高度人材の育成に努めてきたということです。今後もこの伝統を継承することで、環境に資する大学であり続け、人材の育成に邁進していかなければならないと強く感じているところです。

本日は多くの先生にご講演とパネルディスカッションしていただくという予定になっているようですが、ぜひ活発に議論をしていただければと思っております。長時間になるようですけれども、最後まで楽しんでいただければと思います。私からは以上です。

## 神奈川県の植生と外来植物群落 (村上雄秀:神奈川県自然保護協会理事)

神奈川県自然保護協会の村上と申します。本日は「神奈川県の植生と外来植物群落」ということでお話しさせていただきます。この写真は、頭高山(ずっこうやま)です。昨年この時期に小池先生にご案内戴いた場所ですが、県内でも有数の美しい里山林が見られる山ではないかと思ひます。



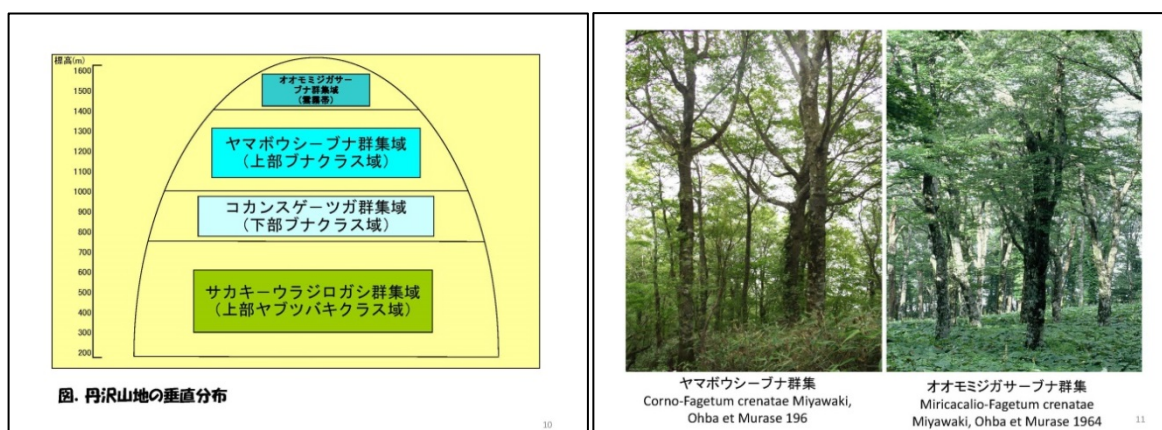
まず、神奈川県の植生とその特徴ですが、神奈川県の最高峰は蛭ヶ岳で、標高は1673mです。そのため神奈川県には亜高山帯、高山帯の植生はみられません。神奈川県あたりですと、夏緑広葉樹林域の上限が約1700m、常緑広葉樹林域の上限が約750mですので、神奈川県では夏緑広葉樹林帯と常緑広葉樹林帯という2つの森林帯がみられるということになります。

| <b>神奈川県<small>の</small>主な森林</b> (自然林 二次林 人工林)  | <b>神奈川県<small>の</small>植生の特徴</b>  |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>常緑広葉樹林               <ul style="list-style-type: none"> <li>・スタジイ・タブノキ林(ヤブコウジ-スタジイ群集/イノテ-タブノキ群集)</li> <li>・カシ林(サカキ-ウラジロガシ群集/シラカシ群集)</li> <li>・クスノキ植林</li> </ul> </li> <li>夏緑広葉樹林               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンノキ-ジャヤナギ林(オニスゲ-ハンノキ群集)</li> <li>・ケヤキ林: 溪谷林(イロハモミジ-ケヤキ群集)</li> <li>・クヌギ-コナラ林: 低地の里山林(クヌギ-コナラ群集)</li> <li>・クワ-コナラ林: 丘陵・山地の里山林(クワ-コナラ群集)</li> <li>・フナ林(オオモミジガサ-フナ群集/ヤマボウシ-フナ群集)</li> <li>・シオジ-サワグルミ林: 山地溪谷林(イワボタン-シオジ群集)</li> </ul> </li> <li>常緑針葉樹林               <ul style="list-style-type: none"> <li>・モミ林(サカキ-ウラジロガシ群集: モミ優占タイプ)</li> <li>・ツガ林(コナラ-ツガ群集)</li> <li>・スギ-ヒノキ植林</li> <li>・クロマツ防風林</li> </ul> </li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>東京都、埼玉県と同様、植生の残存面積・多様性は<b>西高東低</b></li> <li>最高標高は1,673mであり亜高山植生がない。一部を除き厚層ロームに覆われ、<b>自然植生の配分はシンプル</b></li> <li>固有性の高い<b>フッサマケ</b>等要素植生を産する(フナ林2タイプ、海岸自然草原など)</li> <li>湘南、三浦に<b>多様な海岸自然草原</b>を有する</li> <li>箱根は火山植生を有し、ほとんど<b>唯一の湿原</b>がある</li> <li>丹沢および箱根に広面積の<b>フナ自然林</b>と<b>モミ・ツガ自然林</b>が残存する</li> <li>県央を中心に<b>コナラ里山林</b>が広い面積を占める</li> </ol> |

神奈川県の森林の種類です。緑色で示されているものが自然林で、オレンジ色で示されているものが里山林で、人間が管理して利用してきた森林です。紫色で書かれていますのが、人工林。スギやヒノキなど有用樹種を植えて育てているものです。常緑広葉樹林ではまずスタジイやタブノキ

の森林があります。これは低地の自然林で、丘陵地になるとアカガシ、ウラジロガシなどのカシ林が自然林として成立します。神奈川県の場合、低地から丘陵地にクスノキがしばしば植栽されています。夏緑広葉樹林では、ハンノキ林、ケヤキ林、これは低地の水分条件の多い立地にみられます。オレンジ色のコナラ林が里山林で標高によって2種類みられます。もっと標高が上がりますとブナ林、それからシオジ・サワグルミ林などの夏緑広葉樹林が自然林として発達しています。3番目の常緑針葉樹林は自然林としてモミやツガの森林が丹沢、箱根などの尾根地にみられます。あと全域に広い面積を占めるスギやヒノキの植林。そして湘南海岸などではクロマツの防潮林が針葉樹林としてみられます。

神奈川県植生の特徴ですが、思いつくものを7つ挙げてみました。1番目、神奈川県では西部に森林がかなり集中しており、東部は横浜や川崎などの森の少ない市街地が占めています。そのため森林の配分は西高東低で偏っている点。2番目の特徴は亜高山植生が無いので主に夏緑広葉樹林域と常緑広葉樹林域で占められ、自然植生の構成は比較的シンプルであるという点です。3番目が植物区系上のフォッサ・マグナ地域に位置している点です。伊豆半島、伊豆諸島、神奈川県、そして千葉県の一部がフォッサ・マグナ地域と言われる地域ですが、この地域固有の植生が神奈川県には非常に豊富です。4番目は湘南海岸や三浦半島に海岸の自然草原がみられる点。砂丘草原と断崖地草原などです。5番目は箱根で、大涌谷に火山植生(硫気孔植生)がみられ、またほとんど県下唯一の湿原として仙石原湿原があります。6番目は丹沢や箱根にブナ林、モミ・ツガ林などの自然林が広い面積で残存しているということです。植林は常緑広葉樹林域に集中しています。7番目が、県央を中心にコナラの里山林—今回のこのセミナーのテーマになるかと思いますが—が広い面積で見られるという点です。



さきほどフォッサ・マグナ要素の植生がみられるという話をしましたが、これは丹沢山中の自然林の垂直分布です。高海拔地にオオモミジガサーブナ群集、ヤマボウシーブナ群集が生育しますが、この2種の森林はいずれもフォッサ・マグナ要素固有のブナ林です。1つの県の同じ山域に2つのタイプのブナ林がみられるというのは全国的に少ない例だと思います。



2つのタイプのブナ林の林内写真です。左側がヤマボウシブナ群集で、右側がオオモミジガサブナ群集ですが、大きな違いは林床の植物です。左側のヤマボウシブナ群集の林床にはササが見えていますが、これはスズダケです。一方、右側のオオモミジガサブナ群集の林床にはササがみえません。このオオモミジガサブナ群集のようなササを伴わないブナ林が県内に大面積で見られるというのは大きな特徴で、自然植生で非常に特色のある地域であると言えます。オオモミジガサブナ群集は太平洋からの水蒸気の影響で成立する、「雲霧帯」の森林で丹沢では標高1400m以上に見られます。奥多摩では1450m以上です。丹沢には200m以上の標高帯域で出現し、曇霧林であるオオモミジガサブナ群集が広い面積で成立することになります。



大山北斜面のモミ・ツツガ林



黒崎の鼻(三浦市:イノギク-ハチジョウススキ群集)

大山のモミやツツガなどの針葉樹の自然林、これは丹沢山地、箱根に広く見られます。三浦半島の黒崎にはまとまった海岸草原がみられます。県内では貴重な自然草原ですが、おそらく昔は人間が手を入れていた二次草原だったのではないかと思います。



コナラ林:イヌシテ-コナラ群団(横浜市)

これは今回のテーマになっています、里山林の写真です。かなり昔の写真で1970年代の林内の様子です。このような典型的な里山林はもう横浜で見られなくなっています。当時は下刈りや伐採などの管理がまだされていて、写真の左下を見ていただければ分かりますが、林内が非常に明

るいのですね。これが里山林の特徴です。里山林というのは、定期的な管理の下で薪や炭を得たり、肥料を採取したりという目的で維持・管理されてきた、生活上必要な森林ですが、構成種が豊かであることがよく知られています。種数で比較するなら神社などにみられる自然林よりも里山林（二次林）の方が多いです。定期的な伐採と、林内が明るいため草原生の植物も森林生の植物も混生しているのがその原因で、種組成上の大きな特徴と言えます。

ここからは近年の神奈川県自然保護協会（以下「協会」と略）の取り組みについて2つお話しします。まず2012年から2015年のホットスポットの選定のお話。それから、要注意外来生物の選定。これは2018年から2020年です。

**Eco-Kana生物多様性ホットスポットの種類**

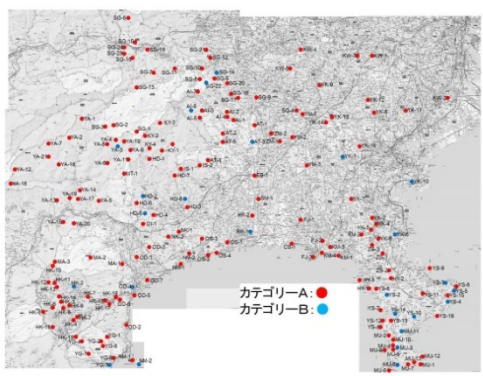
**カテゴリーA**

希少種、RL種などが集中して産する地域（重み付け：県西・県東などの広域区分は加味）

**カテゴリーB**「機能的ホットスポット」

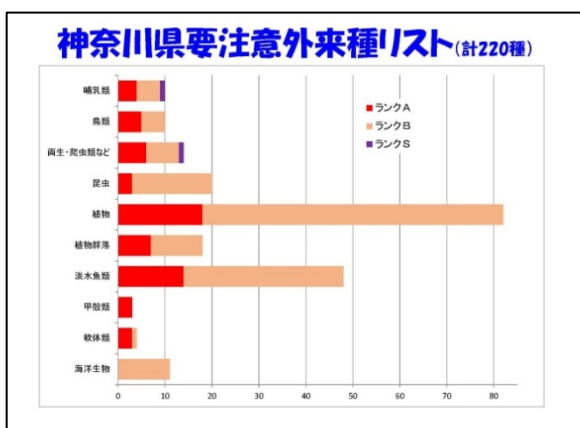
カテゴリーA以外で神奈川県や地域の生物多様性の保全上、特に重要な地域

1. 県内に少ないサギ類の集団営巣地や魚類の産卵場など、生息上の重要地域
2. 典型的な生物相や相観を有する生態系
3. 周辺環境からみて相対的に希少な生態系



**ホットスポット位置図(2015):191ヶ所**

まず生物多様性ホットスポットの選定です。生物多様性上の保全地域としてKBA (Key Biodiversity Area) というものが10年程前に全国で選定されています。コンサーベーション・インターナショナル・ジャパンが日本全国から選定していますが、神奈川県内では丹沢、三浦、箱根の3地域が指定されています。これをもっときめ細かく県内の重要な自然を指定していこうというのが協会の生物多様性ホットスポットで、市民目線も取り入れた選定をするため、希少種の生息・生育地であるカテゴリーAに加え、カテゴリーBというものを加えました。これは地域で典型的な生物相や景観を有する生態系や、周辺環境からみて相対的に希少な生態系を評価するものです。結果として県内で191箇所の生物多様性ホットスポットを選定しました。カテゴリーA(赤丸)が希少種が生育・生息する地点です。カテゴリーB(青丸)が市民目線も取り入れたホットスポットで、これらはほぼ同数含まれます。



次に、外来種の中でも注意を要する「要注意外来種」(注:通称「神奈川県ブルーリスト」)の選定作業を2018年から行いました。外来種の悪影響についてはご存じの方も多いかと思いますが、在来生物を捕食する、在来種と交配する、人の生活や農業、漁業に悪影響を与えるなどの点が指摘されています。外来種問題というのは今、日本の生物多様性上の重要な課題としてマスコミなどにもしばしば取り上げられています。国では「特定外来生物」と「生態系被害防止外来種」をリストアップして防除すべき外来種を公表しています。

これを協会では神奈川県版としてきめ細かい選定をしていこうという趣旨で取り組み、その結果2020年に220種を選定し、公表しました。対象とした分類群は哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫、植物、植物群落、淡水魚です。このなかで最も種数が多かったのは植物で、次が淡水魚類ということになりました。注意すべきランクは3段階で、ランクAは県内のどこであつてもとにかく早急に駆除が必要という種です。防除の緊急度が高い外来種といえます。ランクBは先の生物多様性ホットスポットなど、特に重要な自然が残っている場所では駆除が必要という種です。植物や淡水魚類についてはランクAの種がかなり多いことが分かります。

この中で私が専門として担当したのが外来の植物群落です。外来種にはほとんど単一の株がコロニー;密な集団を作って他の侵入を拒む性質を持った植物があります。そういった群落は群落内に混生する植物や生物相が非常に貧弱になり、生物多様性(種多様性)が特に貧化した空間となります。多摩川河川敷のニワウルシ林の林床には10m×10mの面積の中で3種類ほどの植物しか生育していません。普通、それぐらいの面積の森林ですと、20種から30種の出現種があるので、10分の1ぐらいに減少してしまうということになります。植生の上からはかなり異常な状態で、要注意外来植物群落としてこのような生態を示す群落を中心に選定しました。

| 植物群落 |   |
|------|---|
| 1 A  | セイバンモロコシ群落 <i>Sorghum halepense</i> comm.   |
| 2 A  | トウネズミモチ群落 <i>Ligustrum lucidum</i> comm.  |
| 3 A  | ノアサガオ群落 <i>Ipomoea indica</i> comm.   |
| 4 A  | タチスズメノヒエ群落 <i>Paspalum urvillei</i> comm.   |
| 5 A  | トキワツユクサ(ノハカタカラクサ)群落 <i>Tradescantia fluminensis</i> comm.                           |
| 6 A  | ツルニチチソウ群落 <i>Vinca major</i> comm..   |
| 7 A  | カミヤツデ群落 <i>Tetrapanax papyrifera</i> comm.  |
| 8 B  | キガチコマツナギ群落 <i>Indigofera bungeana</i> comm.   |
| 9 B  | セイタアワダチソウ群落 <i>Solidago altissima</i> comm.   |
| 10 B | ヨシスキ群落 <i>Eriophorum arundinaceus</i> comm.   |
| 11 B | 外来牧草群落<br>(ネズミホソムギ・オニウシノゲサ等) <i>Lolium × hybridum-Schedonorus arundinacea</i> comm. |
| 12 B | カラシナ群落 <i>Brassica juncea</i> comm.   |
| 13 B | ニワウルシ群落 <i>Ailanthus altissima</i> comm.  |
| 14 B | ハリエンジュ(ニセアカシア)群落 <i>Robinia pseudoacacia</i> comm.                                  |
| 15 B | キササゲ群落 <i>Catalpa ovata</i> comm.   |
| 16 B | オオクサノギク群落 <i>Coreopsis lanceolata</i> comm.   |
| 17 B | シナダレスズメガヤ群落 <i>Eragrostis curvula</i> comm.   |
| 18 B | キガチチョウセンアサガオ属群落 <i>Brugmansia</i> spp. comm.  |

要注意外来植物群落は18群落です。傾向としては多年草群落、木本群落がほとんどを占めています。原産地は南方系のものが増加中です。他感作用(注:植物体から化学物質を分泌し他の植物の発芽・生長を阻害する作用)とかコロニー形成などの侵略的な戦略を持っている、森林のような安定地にも侵入できるなど強い競争力を持った種が増加している点も注意すべき課題です。





湘南海岸、横浜市などの県南部で分布を広げるノアサガオ(ランクA)。常緑のつる植物で広い面積を覆う(熱帯アジア)



林内に侵入する常緑のトキワツユクサ群落(ノハカタカラクサ:ランクA)。江の島などの自然林内にも繁茂している(南米)

選定された群落の例を挙げます。この写真は鎌倉市内で見られたノアサガオの群落です。皆様の家の近くでも見られると思いますが、熱帯系のつる植物で昔は冬には枯れてしまったものが近年では越冬し、冬でも開花しているという場所もみられます。これはランクAです。中国産のトウネズミモチの群落もリストに入れました。森林の中に侵入する能力を持っているので、横浜国立大学の構内とか、横浜市の公園のどこでも見られるようになってしまっています。森林に侵入できる木本植物なので、警戒を要する外来植物群落になると思います。

ノハカタカラクサ(トキワツユクサ)の群落も、見たことがある方が多いかと思います。元は観葉などの目的で植栽されたものがコロニーを広げる形で周辺に広がっていったと考えられます。森林の林内にも侵入します。同様によく庭に植えられているツルニチニチソウはきれいな花が咲くのですが、常緑のつる植物で越冬し密に繁茂します。ノハカタカラクサ同様、林内に侵入している地域が県内に広くみられます。



河川敷、空き地に繁茂するセイバンモロコシ群落(ランクA)。植物体に毒性がある(地中海)



河川敷、空き地、公園などに群生するタクスマ/ヒエ(ランクA)。在来のシバ、千ガヤ草原と競合する(南米)



河川敷、公園や都市林の林縁などに繁茂するニッポン群落(ランクB)。林内に他の植物の生育が抑制される(中国)



河川敷や空き地などに繁茂するオオキンケイギク群落(ランクB:特定外来生物)。駆除に乗り出した自治体もある(厚木市)(北米)



現在、県内の河川の堤防斜面や空き地に急速に広がっているのがセイバンモロコシです。毒草です。ススキの草原に置き換わる形で繁茂しており河辺の景観が大きく変わってきています。南米原産とされるタチスズメノヒエもセイバンモロコシ同様、草地に広がっています。穂がない状態だとチガヤほどの高さの植物ですが、畑や水田などの里地に随分増えてきています。

先ほど林内の写真がありましたニワウルシですが、多摩川や境川などに侵入しています。この横浜国立大学の構内にもみられます。森林のように見えますが、おそらくこれは1株で、根から地上茎を伸ばす根萌芽という増え方で密な群落を作ります。中に他の植物の侵入を抑制します。オオキンケイギクも花がきれいでも良く植えられていましたが、特定外来生物に指定されました。今、相模川などでは市民活動で駆除する活動が盛んに行われています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

## 神奈川の広葉樹林 (小池治:横浜国立大学 名誉教授・連携研究員)

ただ今ご紹介いただきました小池でございます。今回のウェビナーの企画をさせていただきました。これは神奈川県内の里山の保全再生に関する研究に横浜国大としてかなり長く取り組んできたということと、神奈川県が大学発・政策提案制度の採択を受けて、一昨年度、昨年度と2年間にわたり、広葉樹林の保全再生による地域活性化と県民の健康増進に関する研究を実施したことを受けて企画させていただいたものです。

今日の私の話ですが、今、村上先生から神奈川県の生態系、特に植物の生態系を中心にお話をいただきました。私は広葉樹林というところに焦点を当てて話をさせていただこうと思います。「生態系の回復と里山再生」というサブタイトルを付けましたけれども、やはり広葉樹は私たちにいちばん身近な木であり、林であり、森なんですね。山に行くと、特に丹沢方面に行ってみると、スギやヒノキの人工林ばかりで、なんか花粉症の原因になっているとか、あまり行っても楽しくないようなイメージがあるかもしれませんが、私はいちばん身近な木と言うとやはり広葉樹だと思うんです。その広葉樹の森が実は神奈川県ではどんどん縮小していますし、残っている広葉樹林も荒廃が進行している。それが私たちにどういう影響を及ぼしているんだろう。また、それを再生させることはどういう意義があるんだろうということについて今日はお話をしたいと思います。

今、村上先生の方から植生についての詳しいお話がありましたので、これは省略いたしますが、今日お話しする広葉樹は、広葉樹、針葉樹と分かれているうちの広葉樹になります。広葉樹には、落葉広葉樹（夏緑広葉樹）と常緑広葉樹（照葉樹）があり、落葉広葉樹というのは里山林のコナラやクヌギなどですね。常緑広葉樹はシラカシ、タブノキ、スダジイなどです。横浜国大のキャンパスはふるさとの森を作ろうということで、シラカシ、タブノキ、スダジイ等の照葉樹林を復活させたわけですが、神奈川県の場合、平野部の潜在植生は常緑広葉樹であるといわれていますが、実際には常緑広葉樹の森というのはほとんどないと言っても過言ではないと思います。落葉広葉樹の森が自然の遷移で常緑の広葉樹に置き換わってきているということはありませんけれども、大きな面積のまとまった常緑広葉樹の森というのは、残念ながら県内にはもうありません。混成していると言いますか、落葉と常緑が混じっているところが多いのではないかなと思います。針葉樹はほとんどが常緑樹で、大半はスギ・ヒノキの人工林です。これについては今日は直接お話しませんが、里山でも昭和30年代後半からの拡大造林の中で落葉広葉樹を伐採し、そこにスギやヒノキを植えて人工林に転換していったという経緯があります。そのため、里に近いところにもスギ・ヒノキの人工林が多くあるというのは、神奈川県だけではありませんけれども、神奈川県には特にそれが顕著に見られるということがいえると思います。



### 神奈川県森林の現状

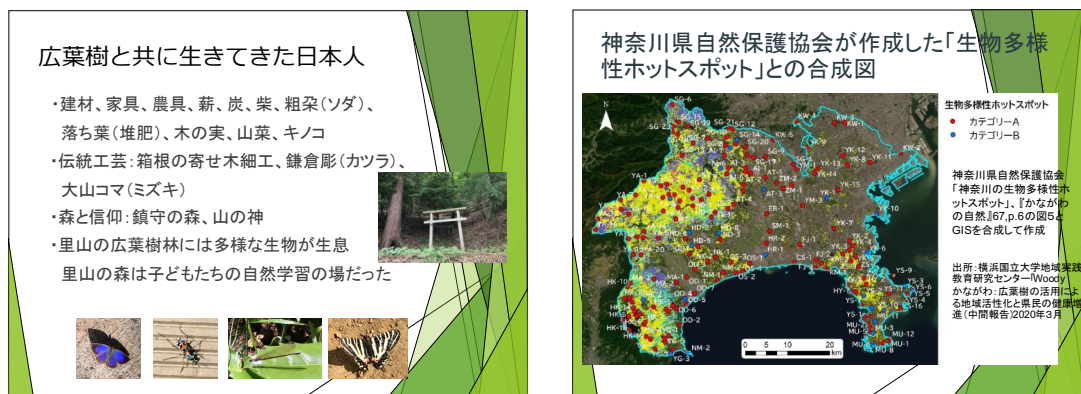
- ▶ 森林は神奈川県の面積の39%
- ▶ まとまった森林は、県西部や三浦半島に存在
- ▶ 森林の9割は民有林(公有林+私有林)
- ▶ 内訳は、広葉樹(天然林)が57%、針葉樹(人工林)が38%
- ▶ 林業の衰退と森林の荒廃
- ▶ 土砂災害の増加
- ▶ 生態系のかく乱  
シカやイノシシによる食害  
ヤマビル被害

出所: アトラス丹沢WEB

神奈川県森林の現状ですが、森林は神奈川県の面積の約4割で、まとまった森林は県西部や三浦半島に存在します。これは神奈川県のアトラス丹沢WEBからダウンロードしたものですけれども、その中の9割は民有林です。民有林というのは私有林と地方自治体が所有している公有林からなるわけですが、私有林の方が多いということになります。内訳は、広葉樹(天然林)が57%、そしてスギ・ヒノキ等の針葉樹(人工林)が38%です。広葉樹(天然林)は57%と過半数を占めているわけですが、実はその大半は丹沢山地、あるいは箱根の方にある。この地図で分かるように、横浜や川崎など相模川から東の地域にはまとまった森林はほとんどありません。一方、丹沢山地の周辺は、かつては非常に林業が盛んだったんですけれども、これも外国からの安い木材の輸入によって林業が衰退し、そして手をかけなくなったことによって森林の荒廃が進んでいます。林内の表面の土が流れてしまって根がむき出しになったところでは土砂災害も増えている。また、人工林はシカやイノシシにとってみれば、食料がありませんので、どんどん里の方に下りてきている。それによる食害が増えていますし、ヤマビルをくっつけたシカが里に下りてきたということで、近郊のところまでヤマビルの被害が広がっているといった生態系のかく乱が起きています。トータルで言うと、神奈川県森林は瀕死の状態にあるといっても過言ではありません。都市部においては森林は本当になくなりつつありますし、残っているところも荒廃が進行しているという状況にあると言えます。

これは神奈川県内の市町村別の林野率、どれぐらい市の面積の中に森が占めているかということグラフに示したものです。当然ですけれども、山北町や清川村では面積の9割ぐらいが森林ですが、県の東の方、都市化している方に行くとどんどん減って行って、横浜市の場合には10%を切るという状況になっています。かつては横浜市ももう少し林野率は高かったんですけれども、開発によってどんどん森林が消えて行った。その結果、このような形になっている。残された広葉樹もかつてのように薪炭林として手入れをすることもなくなりましたので、手入れがされず荒廃が進行しているという状況にあります。





こちらの図は、村上先生の神奈川県自然保護協会の「神奈川の生物多様性ホットスポット」の図と、私どもの広葉樹研究のGISを合成したものになります。これを見れば一目瞭然なのですが、生物多様性が豊かというか、希少な生物が残っているところは、広葉樹の森しかもうないんですね。それだけ私たちの身近なところから生物多様性が失われてきているというのが神奈川県の実状だということがお分かりになると思います。

広葉樹林の保全についてですが、森林を所有している方に見れば、広葉樹林、落葉広葉樹であろうと常緑広葉樹であろうと、利用価値がほとんどない。つまり薪とか炭とかを作るということもないし、建材とか、そういうものを作ることもないということで、放棄され、どんどん荒廃している。そこで、広葉樹林を保全することは、生物多様性保全の観点からも、あるいは人々の保健やレクリエーションの観点からも大切だということで、地方自治体が都市公園や近郊緑地に指定して整備を行っています。神奈川県は、全国の中でも先駆けて「広葉樹林整備指針」というものを策定して積極的に広葉樹林の整備や保全に取り組んでいますが、それでも行政がやっているところは公園化できるようなところに限られています。それ以外のところでは、市民やNPOの皆さんが里山林の保全や再生に取り組んでいる。また、行政と市民が協力して森を保全するという点では、横浜市の「市民の森」とか「ふれあいの樹林」といった制度もありますし、鎌倉市の広町緑地や台峯緑地はまさに市民の運動によって緑地を保全し、それを市が支援するというようなやり方をとっています。それから、かながわトラストみどり財団という組織がありますけれども、ここも積極的にトラスト制度によって緑地を買い上げ、市民の皆さんに保全していただくというトラスト活動を行っています。こういったことで、貴重な広葉樹林が壊れて保全されているわけですが、全体の面積からするとまだまだ少ないし、保全や整備が行われないところでは森はどんどん開発され、開発と言うのは大規模な霊園が作られたり、老人保健施設が作られたりとかということですが、あるいは放置されて荒廃が進んでいるという状況にあるわけです。

しかし、里山の広葉樹林は私たちの生活と大きな関わりをもっています。というのは、私たち日本人は自然の恵みというものを生活に取り入れながら生きてきたわけです。それによって日本の文化は成り立っているし、それによって日本人は心の健康、体の健康もあると思いますけれども、健康を維持してきました。だから、里山林を再生・保全し、そこに生物多様性を回復させることで、私たち自身のウェルビーイング、健やかさといったものを取り戻すことができるのではないかと。そういう点では、森の保全、自然環境の保全と言うと、ユネスコの自然遺産ではありませんけれども、すごくネームバリューのあるような自然環境の保全の方にばかり目がいきますけれども、私たちの身近な里山林の保全についても、広葉樹の文化とか、持続可能なライフスタイルという観点から、私たちはもう一度これを再評価する必要があるのではないかと。そして、この広葉樹の生態系、里山林の生態系を回復させることによって、今の世代はもちろんですけれども、未来の世代、これからの子どもたちのまたその子どもたちのために、健やかな生活、ウェルビーイングを回復させ、引き継いでいく必要があるのではないかとということをつくづく感じる次第です。

### 広葉樹林の保全と再生

- ・地方自治体による広葉樹林の保全  
都市公園や近郊緑地の整備  
神奈川県「広葉樹林整備指針」
- ・市民やNPOによる里山林の保全・再生  
横浜市の「市民の森」・「ふれあいの樹林」  
鎌倉市の広町緑地や台峯緑地  
かながわトラストみどり財団によるトラスト緑地、など

⇒里山林の保全と生物多様性の回復  
広葉樹の文化や持続可能なライフスタイルの再評価  
生態系の回復と未来の世代のウェルビーイング

### 神奈川の美しい広葉樹林50選の選定

ぜひ行ってみてください

神奈川の美しい広葉樹林50選ガイドマップ

2021年4月発行

神奈川県立大学地域連携推進機構のホームページからダウンロードできます

その一環として、私たちの広葉樹研究では、神奈川にも美しい広葉樹林がまだまだあるということをもっと知ってもらいたいし、ぜひ行ってもらいたいということで、「神奈川の美しい広葉樹林 50 選」というものを選んでみました。隣にいらっしゃる神奈川県自然保護協会の村上先生や茅ヶ崎市野外自然史博物館の岸一弘先生と一緒に県内をかなりくまなく歩いて、将来のために保全したいと思う美しい広葉樹林 50 カ所を選び、ガイドマップを作成してみました。これは地域連携推進機構のホームページからダウンロードできますので、ぜひお出かけいただき、広葉樹林の美しさや広葉樹林がもたらすウェルビーイング、健やかさに触れていただくとともに、それが無くなってしまったらどうなるのかということについて、皆さんご自身にも広葉樹林を歩きながら考えていただきたいと思います。

私からの報告は以上になります。どうもありがとうございました。



## 里山再生と人間のウェルビーイング (佐藤峰:横浜国立大学都市科学部准教授)

こんにちは。ご紹介に預かりました、横浜国立大学都市イノベーション研究院の佐藤峰です。今日は「里山再生と人間のウェルビーイング」と、一見、少し大きなテーマで発表させていただきたいと思います。私は国際開発学と言って、国際協力など、いわば途上国のまちづくりや社会構想に関わることを専門にしています。特に郊外から農村、場合によっては電気がない村で仕事や研究をすることが多く、そこには自然が溢れていました。また、千葉県我孫子市と言う、白樺派の作家が多く別荘を持っていた緑豊かなところで育ったこと、そして子どもの頃の夏休みには毎年と言っていいほど、C.W.ニコルさんもお住まいだった、長野県の黒姫で過ごしたので、森や緑がいつも近くにありました。

国際機関や JICA など働いたのちに、横国に来ましてから日本の郊外から地方のまちづくりに関わることになり、ご縁を頂いて、小池治先生が代表をされていた二つの神奈川県との政策調査のメンバーに入れていただきました。調査では里山団体の持続可能性についての聞き取りと、ヨガのインストラクターの資格を持っていますので、森ヨガの講師をさせていただきました。本日は、国際開発学の観点から、里山再生と人間のウェルビーイングはシンクロして行くというようなことをSDGsに関連づけてお話したいと思います。

### ウェルビーイングとSDGsについて

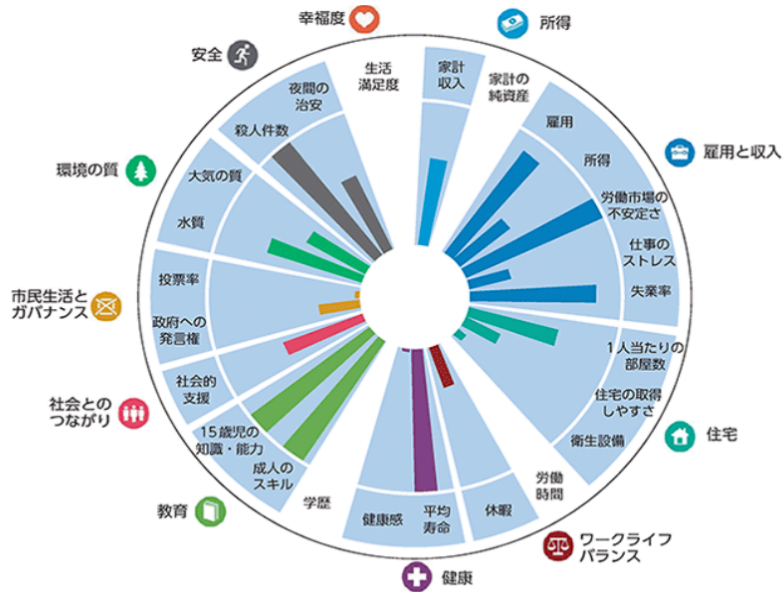
まずウェルビーイングが何かということですが、身体的、精神的、社会面において健康で満たされた状態というのがWHO等の定義です<sup>3</sup>。もう少し身近な言葉では、日々健やかに機嫌よく暮らしている状態と考えています。

ウェルビーイングをどう測るかについては色々な議論があるのですが、図1はOECD(経済協力開発機構)が、ウェルビーイングを項目に分けて評価しているものです。これは日本のものですが、ご覧になっていただくと分かるように、アンバランスな感じになっていることが分かります。経済だとか、教育だとか、治安という意味では日本は先進国の中でもかなり高い評価ですが、ワークライフバランスだとか、住環境、そして自然環境というようなどころでは、低くなるということが分かります。そして、図2が、日本人が今後の生活において力を入れたいと思っていることです。これをご覧になってお分かりになると思いますけれども、私たちにも働き過ぎだという自覚はとてどもあって、自分のプライベートな時間を大切にしたいというふうに思っていることがデータからも分かります。日本人の多くがウェルビーイングの実現のために、ライフスタイルを変えたいなど思っていることがわかります。

---

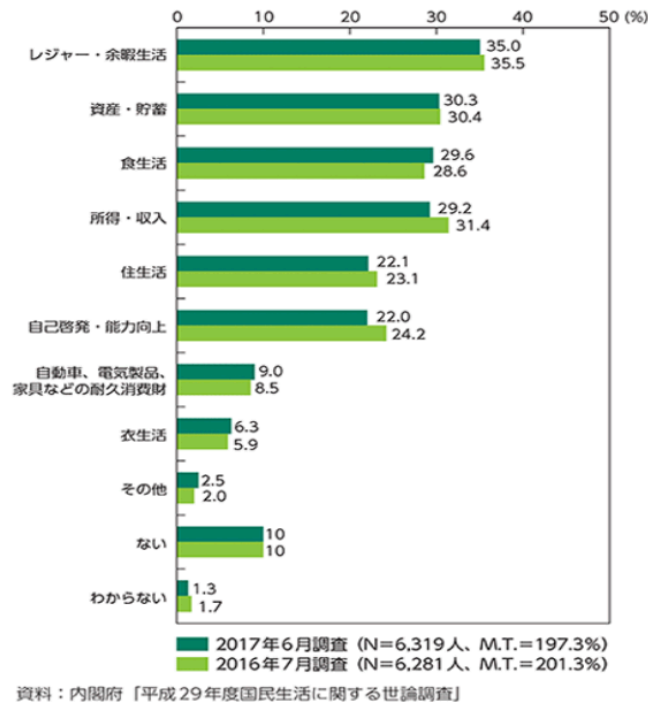
<sup>3</sup> <https://japan-who.or.jp/about/who-what/identification-health/>

図1:日本人の平均的な幸福度<sup>4</sup>



注:各項目における日本のOECD内ランキングを示し、線が長いほど幸福度が高い。  
資料:OECD「How's Life 2017」

図2:今後の生活において力を入れたいところ<sup>5</sup>



<sup>4</sup> <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h30/html/hj18010301.html>

<sup>5</sup> <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h30/html/hj18010301.html>



そして少し観点を变えて少し見ていきたいのですが、ウェルビーイングというのは、実は SDGs と密接な関係にあるものでもあります。直接的にはゴール 3(全ての人に健康と福祉を)が一番ウェルビーイングに近いのですが、このゴールを達成するには、健康の定義をウェルビーイングと捉えると、1から 17 の全てのゴールが実現されないと、なかなか実現し難い状況です。言ってみれば、ウェルビーイングが実現されるということは、個人レベルの SDGs も達成されていくというふう解釈できると思います。

ただ、SDGs のゴールは、着手されやすいものとそうでないものがあると思います。図3は SDGs を項目別に分けたもので、経済、社会、環境、ガバナンス(管理体制)に分けられます。お金の話、人の社会福祉の話、そして環境の話、それを運営していく体制が、私たちの社会を司っています。しかし、やはり経済や人の福祉が優先されます。政権公約を見てもわかるように、これらの二つの要素は、政府や自治体への評価や選挙にも直結しているからです。自然環境は、その2つよりは、積極的には働きかけられにくいということがよく言われますし、私たちの実感でもあると思います。つまり現代社会の仕組みそのものが、経済や社会福祉に寄っているのです、私たちの日常生活も、普通に暮らしているとそちらによりがちになるということが、図1の指標と図2の願望のギャップをも作り出していると考えています。つまりのところ、個人のウェルビーイング、そして、社会の SDGs 両方を実現していくひとつの鍵は、バランスの回復ではないかと考えます。

図3:SDGs の分け<sup>6</sup>



資料：環境省環境研究総合推進費戦略研究プロジェクト「持続可能な開発目標」

また、表 1 は図3の経済・社会・環境の役割分担をより詳細に説明したものです。富の生産や効

<sup>6</sup> [https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sdgs/about\\_sdgs.html](https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sdgs/about_sdgs.html)

率性に関わる経済、富の分配や公平性に関わる社会福祉、そして富そのものの総量を左右して持続可能性に関わる環境の3つの要素は社会の維持に全て不可欠です。このバランスが良い社会がSDGsも達成されやすく、個人のウェルビーイングの維持向上もしやすい社会であることは、皆さんもお分りの通りかと思います。しかし現在では、この3つのテーマは異なる学問領域や省庁、そして政策で取り上げられており、それらの運営上のバランスは、あまり考えられていません。制度環境のバランスが整うのをいくら待ってもきっと無駄ですから、まず個人の日常生活レベルで、3要素をバランスしていくことが、ウェルビーイング実現に繋がり、そのような社会を作るために働きかける人の数が一定数になったときに、社会の「健康」やSDGs達成につながるのではないのでしょうか。

表 1: 経済・自然・環境の役割分担<sup>7</sup>

|              | 機能         | 目的    | 例                           |
|--------------|------------|-------|-----------------------------|
| 経済<br>(資金)   | 「富の生産」に関わる | 効率性   | 成長戦略<br>市場活性化               |
| 社会/福祉<br>(人) | 「富の分配」に関わる | 公平性   | 少子高齢化<br>社会保障<br>格差・ケア・消費   |
| 環境<br>(資源)   | 「富の総量」に関わる | 持続可能性 | 地球温暖化・<br>リサイクル・<br>エネルギー問題 |

<sup>7</sup> 広井良典(2009)『グローバル定常型社会—地球社会の理論のために』、岩波書店、p.21。

## 里山再生と人間のウェルビーイング

さて、ここからは今までの大きな話が、どのように里山のことに関わるのかに目を向けていきたいと思ひます。表 2 は小池治先生が神奈川県と政策調査の中で 21 団体の神奈川県内の里山団体にインタビュー、アンケートをされて作成されたものです。全体としては、経済(地域経済・景観形成)・社会福祉(教育・人づくり、健康・コミュニティ形成)・自然環境(環境・県土保全)の分野で活動が展開していることがわかります。

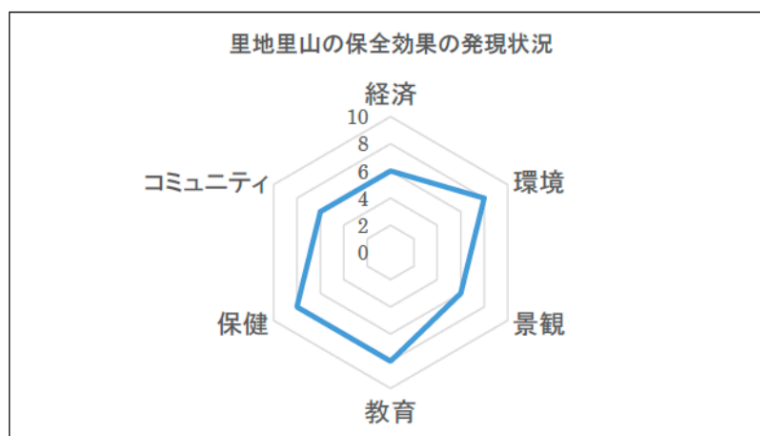
表2: 里山里地団体の活動と成果および創出された価値<sup>8</sup>

| 分野        | 活動                                       | 成果  | 創出された価値                               |
|-----------|--|---|---------------------------------------|
| 地域経済      | 耕作放棄地の再生、農産加工品の生産販売、体験農業、イベント開催          | 農業経済活動の活性化、農業関連消費の拡大、都市と農村の交流拡大               | 経済的価値<br>地産地消（アグリビジネス）への貢献            |
| 環境・県土保全   | 里山生態系の再生、バイオマス利用、環境保全型農業                 | 生物多様性の回復、低炭素社会、循環型社会、自然共生型社会への理解促進            | 環境的価値<br>里山保全による都市生活環境の改善             |
| 景観形成      | 景観修復（植栽、間伐、歩道整備等）、イベント開催                 | 観光客の増加（ホテル観賞、ざる菊まつり、菜の花、里山アート等）               | 景観的価値<br>里山景観の再評価、エコツーリズム             |
| 教育・ひとづくり  | 生き物調査、農業体験、食育活動の推進、伝統文化の継承、ボランティア活動の受け入れ | 学校教育とのパートナーシップの発達、食育の推進、ボランティア活動の展開、CSR の促進   | 文化的価値<br>自然保護や伝統文化に対する価値観の醸成          |
| 健康・コミュニティ | 自治会町内会との連携、伝統行事やイベントの開催、交流の活性化、福祉施設との連携  | 健康寿命の延伸、地域活動の活性化、NPO やボランティア団体との連携、農業と福祉の連携推進 | 社会的価値<br>ソーシャルキャピタルの増進、高齢者や女性のエンパワメント |

しかしながら効果に着目してみますと、図 4 で分かるように、環境に関わることはよくなされていますが、経済に関わること(経済・景観)や社会に関わること(特にコミュニティ形成)はあまり発現していません。つまりは、自然環境に関わる人々は SDGs と逆のパターンで、里山活動を通して保全や環境教育はするけれども、それを資源化して経済や社会活動につなげる働きかけはあまりしていないということです。人間の側に寄った政策と自然の側に寄った政策の双方が経済・社会福祉・環境のバランスを取り戻すことが、人のウェルビーイングを実現しやすい社会を作り出すことにつながるのではないのでしょうか。

<sup>8</sup> 横浜国立大学地域実践教育研究センター(2017) 『未来につなぐ神奈川の里山：里地里山の保全効果に関する学際的研究最終報告書』、横浜国立大学、p.114。  
<https://www.chiiki.ynu.ac.jp/nexturbanlab/pdf/cbe64ad45310ba32808b66807fcd46b24a33140e.pdf>

図4:里地里山の保全効果の発現状況<sup>9</sup>



そして、人のウェルビーイングを個人の工夫で維持向上させていくために必要なことは、身近な自然である里山に関わる時間を意識的に増やしていくことだと考えます。私達が都会的な生活をしていますと、気がつくとも短期的な利益につながる経済活動に関わることに時間を割いてしまいがちです。ですので、私たちが日々の暮らしの中で、まずできることは、時間の使い方に意識的に気を配ることかと思います。今経済活動に関わっているのか、コミュニティなどでの社会的な活動をしているのか、あるいは自然に関わることをしているのか。その時間配分というものを見直していくということが、私達のウェルビーイングを整えて行くための一番近道ではないでしょうか。つまり、経済・社会福祉・自然環境に関わることを、どこで誰と何をして時間を過ごしているのか、ということにもう少し意識的になってみるということです。そして、自然環境に関わる時間を増やすために、身近な自然である里地里山というのは、特に都市や郊外に住んでいる場合にはぴったりの場所ではないかと思えます。

自然環境に関わる時間の中で、実践したいのが循環利用です。都市やその近郊に暮らしていると難しいのですが、図 5 のように里山資源を経済・社会活動につなげていければなあと思います。難しいこともあると思うのですが、保全もするけれど、利活用していくということが里地里山をも回復させていくのではないのでしょうか。私自身、最近森で木を切っているのですが、今のところ、それを玉切りにしてバイオネスト(剪定した枝や落ち葉などによる鳥の巣型の集積所)を作るということをやっています。切ったものをゴミに出して焼却するよりは堆肥化もするので良いですが、これだけだと木も切られ甲斐がないのでは、資源として活かして、「成仏」させてあげたいと思います。

<sup>9</sup> 同上、p.116。

図5: 森林の循環利用とSDGsの関係<sup>10</sup>



そして、その自然環境と関わり、それを活かそうと知恵を絞る時間で、一番大切なのは、働きかけから得る具体的な楽しさだと思います。私は神奈川県との政策調査の中で、神奈川県で15年以上続いている里山団体への聞き取りをさせていただきました。これらの団体の共通の特徴として、全て利活用(経済、それは物々交換の場合も含む)につながることをされているということが分かりました。例えば伐木を利用して、しいたけを育てる。あるいは薪にしてみる。ソバを育ててソバ打ち大会をしてみるというようなことをされていました。かなり皆さんバラバラなことをされているのですが、お話を伺った方に共通するのは、「単純に、みんなで楽しんでもらいたい。苦労はあるが楽しいと思える。」「やっていて一番よかったのは、人との出会い。ここは部落意識が強いところだけでも、活動を通じて色々な人と知り合えた。」「やりたいことをやりたい人がやる。信頼ベースでものをやっている。」など、モチベーション(内発的な動機付け)とそこから来る楽しさでした。後継者問題など抱えておられましたけれども、何でこんなことをやっているのかということをお尋ねすると、皆さん「楽しいから」というふうにおっしゃっていました。

自然と関わる時間を意識的に増やし、他の人たちとも知恵を絞って、自然環境を資源として活かそうと試みる、その経験を単純に楽しんでウェルビーイングを回復していく。そして、里山がその働きかけによって利活用されていく。そのことが、人と自然双方の回復、そしてより健やかな社会の実現につながっていくのではないかと感じています。私からの発表は以上になります。ご静聴ありがとうございました。

<sup>10</sup> [https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/r1hakusyo\\_h/summary/st.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/r1hakusyo_h/summary/st.html)



## 多彩な広葉樹の造形による魅力発信 (原口健一:横浜国立大学教育学部准教授)

では、改めまして、横浜国立大学教育学部で美術教育、特に工芸教育を担当しております原口と言います。よろしくお願いいたします。

題材として「多彩な広葉樹の造形による魅力発信」ということでお話させていただければなと思うのですが、これまで、先生方のお話を興味深く聞かせていただきました。最後は、ちょっと違ったところの視線で私からお話できればと思っております。今、挙げているもの、後ろは具体的に作ったものを何となく後ろに載せているのですが、こういったものについて少しお話をさせていただきます。



多彩な広葉樹の造形による魅力発信

横浜国立大学教育学部 准教授 原口 健一

発表者について (木材造形、美術・工芸教育が専門)

- ・ 01-03 : 修士号 (芸術学、東京芸術大学大学院美術教育)
  - ・ 03-04 : 新潟県立 佐渡高等学校 講師
  - ・ 04-16 : 東京芸術大学講師 (助手~07・非常勤~16)
  - ・ 14- : 横浜国立大学教育学部 准教授
- 国画会彫刻部会員・一般社団法人TOBUSIA理事



私自身の専門なのですが、基本的に木を用いた美術作品を作ったりしております。

基本的には木で作って、古典的な技法、阿修羅像とかにあるように、古来より使われている技法や材料、素材全部において、古典的なものを使って現代的なものというふうにして行く作品と、あとこういう活動ですね。子ども達に向かって木で出来ているもの、いろいろなおもちゃを作ったり、開発してみたりだとか、それを一緒に作って行くという活動をしております。これは長野県の佐久の方でやったイベントの写真になっています。こういったことを自分の造形と社会発信というものをやっております。

これまで先生方の方からいろいろお話をいただいている、SDGs、15番とか、いろいろあるんですけども、今これ国土緑化推進機構のホームページからお借りしているものですが、僕がお話できるようなことはやっぱり森というものを考えて行く、里山というものを考えて行くという時に循環、植える、育てる、収穫する、使うというところになること、僕はここが専門にあると思っていますので、使うというところ、先ほど佐藤先生の方からありましたけど、玉切りされて放っておかれているもの、僕もそれよくもらって来て使うんですけども、その使うということを考えたら、どうやったら使う人が増えて行くんだらうなということを大きく思っております。



実際、木を使うとなった時に、木材って何の役に立つのか。根源的なことを少し考える必要があるかなと思っています。そもそも木材でできることと考えると、建築だったり、家具だったり、什器とか、今だとバイオマスとか、いろいろな方法があるとは思いますが。ただ、私自身が思っていることですが、木材の使い方、使う方向性というのがある意味記号化されていたり、定型化してしまっているんじゃないのかなというのが僕自身、すごく常日頃思う疑問なんです。当たり前で木でできることがこうだからこうでなければならぬとか、そういった感じのことではないはずと思っています。

そもそも木材って何に役立つの？  
 何で木材を使う必要があるの？  
 そもそも何で木を使うの？

そもそも木材でできることって？  
 建築 家具 什器 ……

記号化・定型化してしまった「木材」

私の感じる疑問・問題点

あたりまえのものとして捉えがち  
 知ってるようで知らない

ではどうしたら良いだろうか？

その記号化、定型化したものをどうやったら外して行けるのだろうかということなのですが、僕自身が造形を専門にしているということもありますので、そういった方向からの提案になります。

一方、木材の価値って何だろうってなった時に、実利的なものや精神的なもの、大きく2つあるんじゃないかなって捉えています。実利の方、耐久性とか、加工性、調湿性とか、いろいろあると思うんですけども、大きく言うと、機能性だったり、木の強さというものの側面と、あとよく言われますけど、精神的な方としてぬくもりだったり、癒しだったり、やさしさ、あとは使っていくことでの経年の価値ですね。味わい深くなっていくということもあるし、あとは樹種ごとの個性というのをも

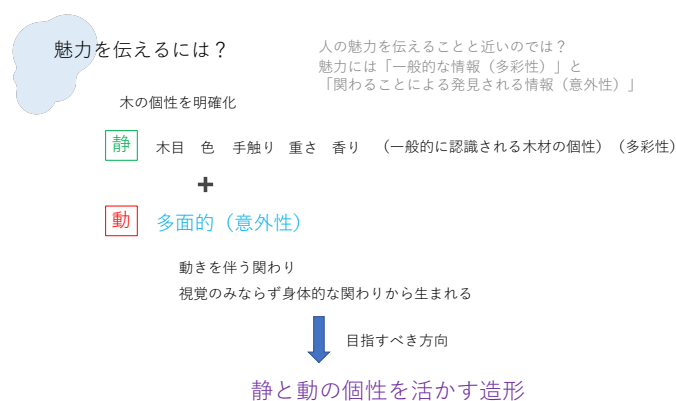


魅力を伝えたい！

ごく大きい、精神的な方に関わって来るのかなと思います。多様な木があって、いろいろ植生があって、その中で生えている木というのはみんな違う。しかも、僕の場合、それを材として使いますので、切ってみると全く違った表情をしていたりするんですけども、この2つ、機能性、「強さ」と「魅力」というのが木の価値だと思うんですけども、この魅力の方というものです。魅力の捉え方って人それぞれバラバラですので、機能性、強さについては、ある程度共通認識できる部分があると思うんですけども、魅力についてというのはなかなか明確化しにくいし、明確化するべきではないと思っているところもありますが、やっぱり魅力を伝えるということをやることによって、木の利用だったりとか、森への関心というのが広がって行くんじゃないだろうかと思います。




魅力を伝えていくという時に考えた時にどうしようかなと考えると、何にしても人の魅力を伝えることと変わらないんじゃないかなと思っています。

いわゆる姿かたちの一般的なものと、関わることによって発見する情報、関わることで分かってくることというのが人の魅力にあるのかなと思うんですけど、木の個性を明確化していく。木の個性と言うと、一般的な個性と言われるものが木目だったり、色、手触り、重さ、香りと言われるものかなと思います。一般的に認識される木材の個性ですけれども、そういったものとプラス、多面的に関わることに出来たもので意外性という、ここを仮に多面的、意外性と載せていますけれども、いわゆる静的な、静と動と当てているのが今正しいかどうか分からないですけれども、仮にですけれども、静と動の構成、動の方ですね、動きを伴っていく関わり、視覚だけでなく身体的な関わりから生まれる、そういった魅力というものが動的なものかなと思うんですけども、静と動の個性を生かす造形というものをやろうということでこの後の発表になって行きます。



この後は先に、最初に挙げさせていただいた造形物があったんですけども、そういったものの説明をさせていただきます。その際のキーワードというのが遊びで、直観ですね。パッと見て理解する、みたいな感じのところ。あと多彩という、この3つのキーワードでこの後の造形物を作っています。

このプロジェクトは、先ほど小池先生の方からありましたが、横浜国大の方のプロジェクトの方に参加させていただいて、僕は形、造形物、形とその製品という形で発信していく。木の魅力、広葉樹の魅力というものを発信していくためにいろいろ作

-  「遊び」 叩く・弾く
-  「直観」 木材の多面性
-  「多彩」 多くの樹種を同時に見えるようにする



ったものとなります。

#### 概要

本プロジェクトは、神奈川県で一般に見られる多様な広葉樹を素材にし、樹種それぞれが持つ多彩な魅力を造形物（カタチ）および製品開発（実用）を通して発信することを目的に、2019-2020年度の2年間をかけて行った。

プロジェクトⅠ  
樹種の違いを感じることのできる美術作品制作

プロジェクトⅡ  
音をテーマとした造形

1の方です。1の方は樹種の違いを感じることのできる美術作品制作ということで、組むと彫るということのポイントに作っています。いわゆる彫り物、彫刻されたもの、木彫です。木彫をいわゆる額装していく。木で額装していくことによって、木って木取りの仕方によって、板目とか、柾目とか、表情が、切り方、見せ方によって、木取りの仕方によって全く変わっていきます。木取りだけじゃなくて、加工方法の1つに彫るというものがあるんですけども、柾目、板目、杢目、杢というの圧力がかかっていたりとか、枝分かれしていたりとか、ちょっと病気になっているところとかというのを製材、木取りしていくと、おもしろい劇的な杢目が現れたりするんですけど、そういったものを杢目と言いますけれども、そういったものを視覚的に同時に提示するというを試みました。

これは1つ目ですね。カエデです。いろいろ見たことある方も多いのかなと思います。くるくる、くるくる回って来るカエデの種なんですけど、種というものを中心に配置して、周りの部分ですね。周りの部分は柾目の板が、ここが柾目で、後ろが板目プラス杢目と言われるような感じになっていくんですけども、そういったものを何の材で出来ていて、どういう木取りにしていこうというふうに見えるというものを直観的にパッと分かるというものを作ったものです。これに関してはちょっと彫り物の方を僅かに彩色しています。

大きくプロジェクト1と2があって、3がもう1つあるんですけど、今日時間が無いので外しております。プロジェクト1の方は樹種の違いを感じることのできる美術作品制作ということと、プロジェクト2の方が音をテーマとした造形になっています。

プロジェクトⅠ  
樹種の違いを感じることのできる美術作品制作



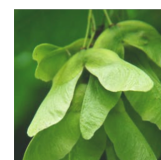
「組む」と「彫る」

「彫物を額装」

柾目、板目、杢目を視覚的に同時に提示かつ「彫」の魅力も同時に提示する



「とぶ」  
素材：イタヤカエデ  
背板：杢目  
額縁：柾目  
着色：水性顔料  
H 28 × w 44 × d 7 cm



次、クワの実ですね。クワの実、真ん中写真上げましたが、つぶつぶした食べるとおいしいですけれども、そのクワの実というものを彫って、同じように額装しているものとなります。これは非常に硬かったですね。

これはホオです。写真として実のホオとしてはかなり派手というか、グロいところもあるんですけども、ホオノキって結構小学校の図工とかで必ず使っている材料だと思うんですけども、あまり意識されることがないんですけども、多くの人が触れたことのある材かなと思います。そのホオというものを彫り物、板目、柾目というものをバツとして提示して、理解してもらおう、直観的に感じてもらうとしたものとなります。



「ほおのみ」

H 28×w 20 ×d 7 cm  
 素材：ホオ（柾）  
 背板：柾目（経年材）  
 額縁：柾目



次になります。次、音をテーマとした造形です。関わりを誘発する、アクションを誘発するために音に注目しました。その際に叩く、弾くというもの、打楽器、撥弦楽器というもので進めております。これに関しては私だけじゃなくて、僕のところの院生である岡君という人と一緒に進めたものとなります。

1 つ目です。マカロンみたいな形をしています。いわゆる木魚をもっとバツと同じ形状にすることによって樹種の違いが分かるのと、かつ、音が違うというものがあるんですけど。こんな感じです。全部同じ形状にしているんですけども、樹種によって当然見た目が違うということと、音が変わって行く。関わることによって、その理解というものの感じというのを深めてほしいという意味で作ったものとなります。



音をテーマとした造形（打楽器）

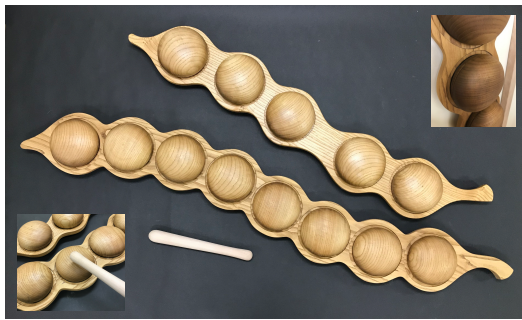
- 1、柾目取り、板目取りによる音の響きの違い  
 →板目取りの方が響きが良い
- 2、材種の硬さによる音色の違い  
 →比重の異なる材を活用
- 3、形状による鳴りの違い  
 → 大きさ、内部空間の広さ、肉厚、開口部の幅

大きさ直径150ミリ全高70ミリ、開口部は2ミリ幅、肉厚8ミリが手頃な大きさがかつ響きが良い。



作品①  
 「9つの木と音」

樹種名  
 クリ ・ シキミ ・ セン  
 キハダ ・ ミズナラ ・ モッコク  
 キリ ・ ケヤキ ・ クス



作品② 「MoDama」 サイズ：大 長125×幅20×厚11cm 素材：円形部：キハダ  
上蓋部：クリ  
小 長100×幅20×厚11cm

ただ単に丸い円盤状のものを並べるのではなく、そのもの自体を支え響きを保証する台座的なものが必要  
→台座にカタチを与える  
→もだま（豆科の植物）をモチーフとした魅せ方



これはまた別な形で少し見た目を造形的な方に寄せていったもの、モダマという大きな豆があるんですけど、それをモチーフにしたものとなっています。これは鍵盤の並びを作って音を合わせようと思ったんですけど、ちょっと未だにあまりに難しすぎて、日によって音が変わってしまうところがなか

なか難しいところになっています。

次が岡君の方でやっておりますギターの方になります。これはトチがメインで、ここに書いてある情報の通りになるんですけども、従来ギターというのは、使う材料というのがこれでなければ、メイプルだったりとか、表面板がスプルースだったりとか、いろいろ決まったルールみたいなことがあるんですけど、そういうことではなくて材を変えて行く。広葉樹という多様性の中で、多彩な中で変えて行くことで音が変わって行くことを実践して行っております。



作品① ギターの各パーツに適した樹種を選び活用したギター

作品名

「Waist In Your Head - トチ -」

H 88 × w 35 × d 11 cm

素材：表面板 → トチ  
側面板・裏板 → クリ  
ネック・ヘッド → クワ  
ペグ・フレット → ホオ  
ブリッジ・ナット → シタン（紫檀）

音色：中音域が豊かな優しい響き。



これはクワですね。クワの木を使ったギターとなっています。ちょっと今、時間が過ぎてしまうけど、ちょっとだけ。あそこだけ今一緒にいますので、少し音弾いてもらおうかなと思っています。（ギター音）これがクワで出来たギターです。こっち、今資料として上がっていないんですけども、この後作ったもので、キリです。（ギター音）ありがとうございます



作品② 同じ樹種の材の差を活かしたギター

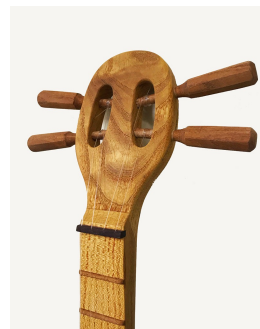
作品名

「The Egg ~ You Say Run - クワ -」

H 84 × w 36 × d 8 cm

素材：クワ  
経年による色のちがいを活かした。

音色：和を感じさせるまろやかな響き。



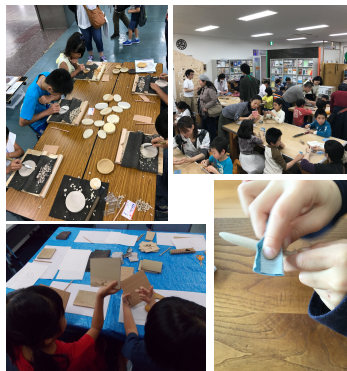


ます。

結構極端な違いのあるもの2つという感じになっています。材料によって音がだいぶ変わって来るということを実感してもらえたらなと思って、少し実演してもらいました。

最後に伝えたいこととして、僕の方としては、やっぱり先ほど佐藤先生もおっしゃっていたんですけれども、僕は単純に木に触れて関わることを楽しんで欲しい。そこから触れることによって、関わることによって木でできること、やってみたいということに夢が膨らんで欲しいなと思っています。夢が膨らむような仕掛けだったりとか、物だったりというものを社会的に発信していきたいし、そういったことを発信できる子ども達とかというのが増えて行ってほしいなと思っています。

すみません。ここで終わります。ご清聴ありがとうございました。



#### 伝えたいこと

単純に木に触れ、関わることを楽しむこと。

そこから、木でできること、やってみたいことに夢が膨らむ



## パネルディスカッション

モデレーター: 志村真紀(横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授)

パネリスト: 村上雄秀・小池治・原口健一・佐藤峰

司会(志村): 以上で4人のプレゼンターの方からのプレゼンテーションが終わりましたので、パネルディスカッションに入って行きたいと思います。まず、視聴者の方から2つご質問が来ていますので、少しその質問を挙げていきたいと思います。お一方目は村上先生への質問になります。「里山林、具体的には常緑広葉樹林は極相林に遷移すべきでしょうか？ それとも手入れを続けて維持すべきですか？」、村上先生、いかがでしょうか？

村上 難しい質問ですね。時間が経てば、放っておいても里山林は極相林になってしまうわけですが、ただ、何千年も日本人の生活と共存して来たのが里山とか、里地草原と言っているものなので、そこは既に独自の生き物たちが棲んでいる場所です。ですから、現在の地域の生物多様性を保全しようという観点からはやはり里山林、里地草原、あと里地ですね、畑とか水田を含めて、それらを地域の中で保全するというのは大事なことだと思います。人間が維持管理してきたそれらの植生はやはり何らかの管理をして、現代の人間生活に役立てるような方向で持って行ければ良いと思います。

司会 ありがとうございます。もう1つの質問です。小池先生への質問となります。「小池先生が里山について研究されたきっかけなどがあれば教えてください」とのことです。

小池 きっかけは私自身が横浜の片田舎の里山のようなところで生まれ育って、そこでいろいろなことを学んで大人になった。こういう経験をぜひこれからの子どもたちにもしてもらいたいし、里山と関わることによって私たちは、今は物質文明で何でも手に入るし、便利な世の中なんだけれども、里山で得られるものというのは本当に私たちを豊かにしてくれるということを実感しているので、この里山が神奈川県から無くなってしまわないのは嬉しい。ぜひみんなで里山を再生させて、みんなで里山を楽しみたい。里山に行っているいろいろなおいしいものを食べたいとか、昆虫を採りたいとか、そういうことがあります。

司会 ありがとうございます。では、この後、第二部のパネルディスカッションにおいては、今回のテーマ、ウェルビーイングの観点から里山再生と生態系の回復に向けて、どのようなアクションが今後必要とされるか、パネラーの皆さんから、3分ほどずつお考えを述べていただければと思います。ご視聴の皆様からもお考えや質問等もお待ちしておりますので、質問がある方は、Q&Aの方にお書きください。では、まず村上先生の方からどのようにウェルビーイングと里山の回復に向けて、どのようなアクションが必要か、聞かせていただけますか。

村上 生物多様性の方ではメジャーな考え方として、「生態系サービス」という言葉があります。生態系サービスの中で、特に文化的なものであるとか、衣食住に関わる場所では、里山とか里地植生というのが非常に重要な役割を持っていると思います。先ほど説明したような自然の草原とか、自然林というのは人間の干渉は加えてはいけない場所です。また里地の水田や畑はすでに生産のため人間が厳密な管理をしている場所ですから、そこに第三者が足を踏み入れたり手を加えたりということはできないわけです。しかし、里山林であるとか里の草原というのは適度の立ち入りなどの人間の干渉に耐える植生であり、むしろ干渉しないとうまく維持できない。ですから、先ほど小池先生の方からお話もありましたけど、むしろ人間がどんどん関与して、どんどんいじって、そこでいろいろな楽しみ方ができる、ウェルビーイングに役立つような植生としては一番適しているかと思えます。干渉に耐える特性というのが特異な点で、攪乱を加えても健全な状態が保たれるという性質を生かして、自然に関わる、楽しむ場所として里山を利用、活用して行くと良いと思います。

村上 生物多様性の方ではメジャーな言い方をすると、生態系サービスという言葉があるんですね。生態系サービスという中で、特に文化的なものであるとか、衣食住に関わる場所というのは、里山とか里地植生というのが非常に重要な役割を持っていると思うんです。先ほど説明したような自然の草原とか、自然林というのは人間の干渉は加えてはいけないし、また里地へ行って、いわゆる水田であるとか、畑というのはすでに人間がちゃんと管理している場所ですから、そこに第三者が手を加えるということはできないわけですけど、里山林であるとか、里地の草原というのは人間の干渉に耐える植生でもあるし、むしろ管理しないとうまくいかない。ですから、先ほど小池先生の方からお話もありましたけど、むしろ人間がどんどん関与して、どんどんいじって、そこでいろいろな楽しみ方ができる、ウェルビーイングに役立つような植生としては一番最適なのかなと思います。干渉に耐えるというのが実は一番大事なところで、攪乱を加えていても健全な状態が保たれるということがあるので、どんどん、もっと頻繁にそういった自然に関わる場所としては、里地里山というのはもっと利用すべきなのかなというふうには思います。

司会 ありがとうございます。では、次に小池治先生、いかがでしょうか？

小池 はい。ウェルビーイングを私は「健やかであること」ととらえているんですけども、森と関わることとか、森とともに生活することによって、人間はより健やかになれるというのは私の信条でもあります。しかし、グローバルなレベルで言うと、どんどん森林が破壊されているわけですね。なくなっていつている。日本もそれに加担しているわけです。国内の森林は放置しながら、外国からどんどん材木を輸入しているという点では、熱帯雨林の破壊とかに間接的に関わっているわけです。

やはり人間は森林生態系の一部なんですね。その森林が破壊されて無くなっていけば、これはウェルビーイングを維持することもできなくなってしまいます。人間は森なしでは生き

ていけないはずなんですね。先ほど言いましたように、物質文明ということで、森林がなくても、楽しい生活が送れるじゃないかという向きもあるけど、森が無くなってしまったら、何が起きるか。今の地球温暖化もそうですし、あるいは海がどんどん荒れているということも、森から栄養分が川に流れ込んで、それが海に行くということですので、そういう点では、森林生態系がどんどん損なわれてきているということは、地球全体の生態系が損なわれてきているということであって、将来的には必ず人間にしっぺ返しがかかる。そういう点では、今の私たちのウェルビーイングだけではなくて、将来の世代のウェルビーイングを考えた時に、まずは身近な里山林の保全というところから取り組みましょう。それをどんどん広げていきましょうというのが私からのメッセージになります。

司会 ありがとうございます。人間は生態系の一部であるということは非常に突き刺さるような言葉でした。ありがとうございます。引き続きまして、佐藤先生、いかがでしょうか？

佐藤 私の発表の後半がこのことへの答えだったと思うんですけども、一言で言うと、「よく生きて、よく活かす」ということを思っています。人間の側から見ると、日々の生活、ライフスタイルに自然を取り込む時間の比重というのを増やしてよりよく生きることで日々のウェルビーイングの実現につなげていく。もちろん虫が嫌いという人もいますので、それがベランダのプランターから始まっても、全然いいと思うのです。何か自分が緑と関わる時間、関わる機会を増やす。それを楽しむという、その感情が周囲や次世代に伝染して行けばいいと思います。それって楽しいことなんだな、それを習慣にするのって楽しいことなんだなということを見せて行くということが大事かなと思います。そして里山のウェルビーイングということで言うと、先ほども申し上げたようになるべく資源として活かしてあげることができるいいと思うのです。木を切るだけじゃない、草を刈るだけじゃなくて、その先にそれが違う形でこのようにまた自然が蘇られるように、何とか形を変えて行ける。昔の里山の暮らしはまさにそういうことだったと思いますので。いろいろ難しいところはあっても、利活用を考えて行く。保全は英語で Conservation ですから、元々は、自然と人間がお互いに(Con)サービスをする(Serve)という語源だと思うのです。そのような関係性を現代社会で再構築していくことがお互いの健やかさにとって鍵になると思います。ありがとうございます。

司会 今利用していくことも大事だということを最後におっしゃってくれたんですけども、まさに利用、使うという観点から、原口先生いかがでしょうか？

原口 はい、ありがとうございます。私も利用ということになるかなと思っています。ウェルビーイング、里山とか、この先というものを考えて行った時に、木を使って物を作って行くということに対して抵抗がある人って実はあまりいないんですよね。子供向けにワークショップとか、いろいろやるんですけど。大体お父さん、お母さんが付いて来て、最後は結局お父さんが必死こいているというパターンが一番多いんですけども。それまでちょっとだけ触れているだけでも、気持ち的に簡単に入っ

て行けるという素材であるということが、木というのはあるのかなと思います。それだけ触れて考えること、手で考えるというようなこともよく話すんですけど。手で考えること、頭で感じると言っているのか、分かりませんが、そういう機会というのは実は都市部に暮らしていても、たくさんあります。いろいろなところに公園樹とか、街路樹が生えているわけですよ。そういった木というもの、枝でも何でもいいと思うんですけど、そういったものを拾って来て、何かを作ってみるとか、ただ、落ちている枝を生けてみるとか、そういったことでも僕はいいと思います。そういったところから入って行くことで理解がそこに向かって行って、結果、もっといろいろ大きな物事を考えるようになっていくのかなと思うんですけど。何気ない日常の中にある木というものというのを感じて欲しいなって、そのことがこの先につながっていくんじゃないかなと思います。

司会 ありがとうございます。4人の先生方からの意見を少しまとめさせていただくと、村上先生は、里地里山草原というのは、人が管理して関与する必要がある。そして、さらには鑑賞に耐える状況であることが必要であるとおっしゃっていました。そして、小池先生は、人間は生態系の一部であるので森がなくては生きていけない。将来のウェルビーイングも確保するために向けて、身近な里山から接点を持って行くことが大事であるとおっしゃっていました。また、佐藤峰先生は日常の中で緑と関わる時間を増やして行く。そして、なるべく資源として生かす、利用することをしていくということが必要だと。最後に原口先生は、利用する、使うという観点ではぜひ手で触れて考えて欲しいというふうにおっしゃっていました。都心部にお住まいの方も、ぜひ街路樹等の広葉樹から触れる、扱ってみるところが接点になるのではないかというふうに、本当に皆さんの日常のところから接点を持つるところから関わって、そのための時間を作って行く。そういうことがウェルビーイングに向けたライフスタイルとして採り入れるまず第一歩かなと感じられました。

視聴者の皆さんからもご意見いただいておりますので、私の方で読み上げさせていただきたいと思います。まずマツウラさんからです。「二元的に管理していくべきかと。人の入れない山間部は自然林にして行き、それ以外は管理すべきではないかと思います。管理するところとして、水源部分は広葉樹を主体に環境林として管理していく。里山付近は経済林と環境林として管理していく」というようなご意見、お考えを言っていただきました。この点、村上先生か小池先生、いかがでしょうか？

村上 じゃあ私の方から。まさにその通りだと思います。管理には勾配があつて、毎日手を加えなければならぬような水田や畑のような所もあるし、絶対管理を拒んでいるような自然林、自然草原というものもあります。それが都市域から農村、農村から里山、そして自然が残る奥山という配分がうまく地形的、空間的に出来ていたのが日本のおそらく江戸時代ぐらいの状況だったと思います。それをもう一度評価して、頻繁な管理をする場所と厳密に保護すべき場所の間の管理上の勾配という形を実現していくというのが大事だと思います。昭和以後、奥山の自然にも日本人は干渉してきてしまいましたから。ご意見の通りだと思います。



司会 全くその通りですということで、回答いただきました。

次の視聴者参加等のご意見です。「今の消費優勢社会から価値観を変えないと、多くの人は里山の暮らしを日常的にするのは難しいのかなと思いました。好きな人だけやってみるのではなくて、都市の中、日常の中に自然が植えて行けば、親しみが増えるのかなと思いました。」ということで、佐藤峰先生、いかがでしょうか。

佐藤 まったくその通りだと思うんです。里山と言うと、自給自足的な里山暮らしみたいなものを連想しがちなんですけれども、そういうのではなくて、日常の中に少しずつ自然が増えて行く。自分の身近な暮らしの中に自然を増やすということがまず大事だと思います。それと、やっぱり今の里山活動は自然や生き物が好きな人だけがやっているという場合も多いと思うのです。人間よりも自然が好きなような方々や生態学の専門家が、保護だけをしているような場合もあるかと思います。そうでなくて、もっと私たちのような人文社会科学の学者も里山に関わって、経済や社会福祉への貢献にもつながるような、バランスの良い里地里山の持続可能な利活用のモデルを作って行く。日々の暮らしの豊かさにつながるようなモデルを作って行くというのは、とても大事だなと思っています。

司会 はい、ありがとうございます。あと1人、お一方、視聴者の方からのご意見を最後にしたいと思います。「里山広葉樹を木材として活用できるよう、SCM(サプライチェーンマネジメント)を作り経済を回せるようにする必要があると思うのですが、現実的にどうなんでしょうか？」ということで、原口先生、いかがでしょうか？

原口 里山の広葉樹、木材として活用できるようにするのは現実的にそうあって欲しいって、心のそこから願っています。いろいろな広葉樹があるんですけど、それを供給する方法論というものが必要だと思うんです。他方で、需要、受け取る側というものがいろいろな広葉樹の種類があるにはあるんですけど、その違いとか、そういったもの、何ができるのかということが分かることも非常に大事かと。実際問題、僕自身が教育学部ですので、子ども達、これからの世代という年齢の子ども達というものに対して学校の授業内、特に図工ですけれどね、僕の場合は、図工だったりとかということの中に木というものを採り入れるということ、ある種強制的な側面も持っているのはあるんですけども。図工なんかでいろいろな木の種類、その土地土地において主体となる木、自分の場所はこういった木があっってこう使える。あっちはこういうのがあるとかって分かるようなシステムづくりも同時に進めなければ、なかなか需要と供給のバランスが取れないかなとは今思っています。

司会 ありがとうございます。サプライチェーンという観点で私から少し補足というか、述べさせていたきたいと思うんですけど。私は建築を専門としているんですけども、広葉樹林、広葉樹の市場というのですか、建材のための、あるいは各自使うための市場というのが日本では3か所しかないと聞いています。旭川と、木曽と、あと岩手の方にある。でも、3箇所しかないということは、その他のエリアでは市場に出回りにくいんですね。そのために林業家、あるいは木材加工場と建築家、

あるいは家具を作る人が直接的な関係を持たなきゃいけないという点がネックになっています。

その一方で今、原口先生がおっしゃってくれたように教育の仕組みとして流れを作ることで、そういった使うサプライチェーンというのも出来るし、何よりも人材教育という面で、小学生、中学生が図工の過程で広葉樹を用いることで、将来まさに、広葉樹の課題とか、特徴を知った人材を育成することができるというようなサプライチェーンにもつながるんじゃないかなと思いました。

最後に、先ほども最後にと言ったところですけど、アキグチさんからのご意見を最後にしたいと思います。「木を使うことと、保全のためにそのまま残すバランスが重要なのではないかと思うのですが、どれぐらい、何割ぐらい人間生活に対して木を使えるものなののでしょうか？」難しい質問ですね。小池先生か、村上先生、わかりますでしょうか？

小池 いやいや、何割というのは難しいんですけども。先ほど経済林という話ありましたが、里山の広葉樹林も経済林として活用すべきだと思うんです。いろいろな使い方があから。やはり人間は何千年にわたって木を切っては植え、木を切っては植えてきたわけなので。そうやって人間が木と共に生活している、そのことは大事なのね。丹沢の奥地のようなどころでは、人間が手を加えともう二度と回復できないような破壊が起きてしまう。そういうところは保全すべきだと思いますね。貴重な森林生態系は保全すべきだと思います。

司会 場所によって使い方というのをちゃんと考えて運用していく、保全していく、そういう感じですかね？

小池 環境林というお話が先ほどありましたけれども、例えばきれいな空気を供給したり、きれいな水を供給するというサービスが森林にはあるんですけども、それはものすごく大事で、それを私たちが考えないでどんどん木を切ってしまうと、人間のウェルビーイングどころか、生存に対する大きな危機になるわけです。そういう意味でも環境を守るために保全するというのは当然大事ですし、例えばエアコンがあれば温暖化してもいいじゃないかみたいなことを言って、どんどん木は切っちゃえ、みたいなことをすると、将来的にはもっともっと生態系が崩れてしまって、もっと大きなダメージを人間は受けるんじゃないかと私は心配しています。

司会 そうですね。後の将来に向けて心配が募らないようにわれわれ今から、今日の先生方が挙げてくださったように、いろいろな身近な側面から、身近な接点からライフスタイルに採り入れて行くということが第一ステップとして大事だなと思いました。

## 閉会の挨拶 (佐土原聡:横浜国立大学地域連携推進機構長)

ご紹介いただきました佐土原です。機構長を務めていまして、今日共催している機構を管轄しております。今日はとても身近に生態系を感じる、お話をたくさんいただきまして、楽しく聞かせていただきました。私自身、自然豊かな環境が大好きで小さいころ、虫を追いかけて過ごしてきたという、そういう原体験をもち今を過ごしているものですから、今日の話は本当にいろいろな意味でハッとしたり、身につまされたり、これからそうするべきだとなぜいたり、とてもいろいろなことを学ばせていただきました。

今日の話は最初に村上先生からの神奈川県の話、そして小池先生からは広葉樹林 50選の話で身近に感じるということですね。そして、佐藤先生からウェルビーイングの視点から楽しむために、ということ、そして原口先生からは五感で感じるということですかね。いろいろ動と静とか、一連の話うかがっていると、だんだん身体に近いところに話が近づいて来て、それでもう一度それを戻して、生態系をどう回復し、これから必要なアクションは何かということを中心に議論しました。視点も非常に興味深いですし、あと私自身は理工系の人間、建築をやっているものから、文理が一緒になって考えるいろいろなことが生まれて来るなということを強く感じました。

私の専門は建築なんですけれども、建築の分野でもだんだんと今高層の建物に木を使っていくことになり、木のぬくもりとか、温かさとか、そういうことを感じながら都市の中でも働いたり、生活したりすることができる環境がだんだんと出来て来て、とても嬉しく思っています。今日のお話のようにいかに身近に感じて、それを五感でも本当の意味で自分と自然が一体になっていく、そういう生活を日頃から送ることでそれが生態系を回復し、最後の議論にもありました、今地球温暖化でいろいろな災害が起こっていることをどうやって防ぐかを考える上でも本当に身近に感じるところから始めて、それをいろいろな動きにつなげていくことが大事だなと強く感じました。

私、地域連携推進機構で取り組んで行く中で里山というテーマはこれからますます重要になって来ると思っております。そういう意味では今日の議論をベースにしながら、これから皆様にもいろいろご参加、ご協力いただき、こういったテーマを掘り下げる機会を持っていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。今日はどうもありがとうございました。